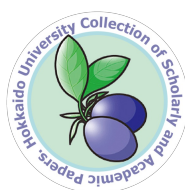




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	幡谷則子・千代勇一編著『辺境からコロンビアを見る：可能性と周縁性の相克』
Author(s)	水谷，裕佳；Mizutani, Yuka
Citation	境界研究, 16, 53-57
Issue Date	2026-03-25
DOI	https://doi.org/10.14943/jbr.16.53
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/99363
Type	departmental bulletin paper
File Information	16_05.pdf



[書評]

幡谷則子・千代勇一編著

『辺境からコロンビアを見る：可能性と周縁性の相克』*

水谷 裕佳

はじめに

序章に記されている通り、南米大陸の北西部に位置するコロンビアは、太平洋とカリブ海に面し、ベネズエラ、ブラジル、ペルー、エクアドル、パナマに接している(3頁)。本書は、日本またはコロンビアの大学において、社会学や人類学、建築学の観点からコロンビアおよびその近隣諸国を専門とする6名の研究者によって分担執筆された。そして本書は、コロンビア全般ではなく、同国の地理的境界地域、すなわち本書で「辺境」と表現されている地域に焦点を当てている。

コロンビアの辺境は国境周辺地域と沿岸部、島嶼部によって構成されている上、気候帯や地形の面でも多様である。また、同国の辺境は、首都ボゴタや、メデジン、カリといった主要都市から地理的に離れている。編著者の幡谷は、上記のような特性は、コロンビアの辺境に国家間の紛争や行政サービスの立ち遅れといった困難をもたらしてきた一方で、同地域を国家中心部による政治的、経済的支配から守ってきたと指摘している(3–5頁)。この指摘にも表れているとおり、本書はコロンビアの辺境を多面的に捉え、その地域に暮らす人々の「生き様を通し人間と自然、中央権力と周縁化社会、支配—被支配、などの複合的な関係性を分析」(ii頁)し、さらには同地域の持つ「レジリエントな力に共感し、文字化」(ii頁)することを試みたものである。

1. 本書の構成と内容

本書の構成と各章の執筆者および翻訳者は以下の通りである。

まえがき(幡谷則子・千代勇一)

略語一覧

序章 辺境からコロンビアの今を見る(幡谷則子)

* 幡谷則子・千代勇一編著『辺境からコロンビアを見る：可能性と周縁性の相克』上智大学出版、2024年。

DOI : 10.14943/jbr.16.53

第1章	コロンビアの辺境を概観する(幡谷則子)
第2章	違法作物栽培から見た辺境化と脱辺境化：マグダレナ・メディオの事例から(千代勇一)
第3章	風がもたらすもの：ラ・グアヒラ県のワユー民族とエネルギー産業(松丸進)
第4章	チョコ県の開発と紛争：川と生きるアフロ系コミュニティの人びと(幡谷則子)
第5章	トゥマコの都市形成とクライエンテリズム(柴田修子)
第6章	地域経済と周辺地域間の相互作用：トゥマコにおける貝採取女性たちの事例(ブルバーノ G., ダビッド[幡谷則子訳])
第7章	「二面性」という周縁：国内避難民の可視性について(近藤宏)
終章	辺境で生まれる可視性と周縁性の相克(幡谷則子)
	あとがき(幡谷則子・千代勇一)
	執筆者紹介
	索引

続いて、各章の内容を紹介する。序章には、辺境に限らないコロンビア全体の地理、国家の成立に至る歴史と辺境の形成過程、国内のエスニック集団と彼らの居住地、経済開発や土地所有と国内紛争の関係性といった、本書を読むにあたって必要となる基本的な情報がまとめられている。また、各章の概要も簡単に紹介されている。章の最後には、「現代の紛争と平和構築の課題を、辺境に住む人びとを主人公として描いていく」(19頁)ことが本書の目的として掲げられた後、様々な課題を抱えつつ「プラグマティックに行動することが、彼らの自律的、内発的な解決方法であるし、生き抜くための知恵であり戦略」(19頁)だと述べられている。

第1章には、コロンビアの辺境に限定した事項が、同地域において人口比率の高い先住民、アフロ系住民、土地なし農民に着目しながら述べられている。著者によれば、コロンビアの辺境は、上記のような社会的に周縁化された人びとの生活圏として機能してきた(25頁)。さらに、著者によれば、同国では紛争に起因する国内避難民として辺境の住民を中心とする人びとが都市部に移動するようになり、21世紀に入ってからには村落全体での避難と帰還を繰り返す形の移動パターンが見られるようになった。加えて、左翼ゲリラであるFARC(コロンビア革命軍)と政府が和平合意に至った2016年以降は、辺境のいくつかの地域において治安悪化や人権侵害が生じ、限定的に国内避難民が生じている(43-48頁)。

第2章では、コロンビアの辺境における違法作物、すなわちコカの栽培が取り上げられている。コロンビアとベネズエラの国境、および同国とエクアドルの国境付近で、麻薬の原料としてコカが栽培されている。コカイン精製に必要な材料の運搬や、完成した麻薬の密輸に適している上、中央政府の監視が届きにくいことや、例外的な制度が適用されている土地が点在することが、上記の国境地帯に栽培地域が集中している理由であると著者は考察している(58-61頁)。さらに、経済的に困窮した辺境の土地なし農民にとっては、コ

カ栽培は生存戦略の一つである(71頁)。著者は、そのような事情を踏まえて、「入植者の土地所有問題を解決しない限りは、辺境の問題も辺境に強い親和性のある違法作物栽培の問題も解決できない」(82頁)と述べている。

第3章で論じられているのは、コロンビアとベネズエラの国境に位置し、カリブ海に面する半島に居住してきた先住民民族ワユーと産業との関わりである。ワユーの人びとは、近年では観光業や工芸品の製作や販売にも従事しているものの、伝統的には牧畜、漁業、農業を生業としてきた(92頁)。しかし、1970年代以降、彼らの居住地において製塩業や石炭採掘が始まると、ワユーの生業や文化を支えてきた自然環境の破壊(100頁)や、コミュニティへの脅迫(104頁)などが生じるようになった。そして著者は、同地域で近年風力発電が開始されたことに触れている。風力発電はクリーンなイメージがある一方、過去の産業と同様に「関係するコミュニティとの十分な議論に基づいた合意がなされていない」(109頁)まま建設計画が進められた事態に、著者は警鐘を鳴らしている。

第4章では、太平洋に面するチョコ県のアフロ系コミュニティの組織化について考察されている。コロンビア政府がアフロ系コミュニティの存在を認め、彼らが集団として土地に関する権利を得たのは1993年のことであったが、主に非合法武装組織の活動や資源開発の影響によって、アフロ系の人びとが土地を追われて国内避難民化する状況はその後も続いている(122頁)。その中で、農民の生活改善やコミュニティの自律化を目指す非営利団体が、人びとの組織化を促進し、コミュニティの暮らしを守ろうとしている(136頁)。

第5章では、コロンビアとエクアドルの国境に近く、太平洋に面する、ナリーニョ県トゥマコ市の歴史が述べられている。同市は「パトロンが物資や保護などを提供する見返りとして、クライアントが忠誠や政治的支援を行う、という政治的な慣行」(151頁)であるクライエンテリズムに基づいて統治されていた。しかし、クライエンテリズムに対する市民の反発が生じ、それが社会運動に発展していった(156頁)。著者によれば、トゥマコ市の社会運動とコロンビア全体の社会運動の連携は叶わなかったが、地道な取り組みは続いている(166頁)。

第6章では、第5章でも取り上げられたトゥマコ市のアフロ系女性による、生業としての貝の採集が、「紛争に対する(人びとの)レジリエンス(回復力)による戦略」(173頁)であると述べられている。社会的に周縁化されたアフロ系の人びとは、必要に迫られて海や川の沿岸に広がるマングローブ林に生活圏を広げ、そこで見つかる魚介類を採取するようになった(180頁)。著者は、この事例が、「人びとは、外部や政府の支援に頼る必要なしに、ローカルな発展パターンを自ら確立することができる」(189頁)ことを示すものであると結論づけている。

第7章には、コロンビアの国内避難民に対する分析が掲載されている。著者によると、国内避難民は、1990年代まで「ほかの人びとにとって不可視であるかのような可視性しか

もち得ない」(208頁)状況にあった。その後可視化は進むものの、彼らは疑わしい素性を隠している、すなわち二面性を持つ人びととして語られる傾向がある(218頁)。それによって、国内避難民が「社会の周縁に留まるまま放置するモラルがコロンビア社会に形成されている」(222頁)ことに、著者は疑問を呈している。

終章には、序章よりもさらに詳しい各章の要約が掲載されている。また、本書における事例分析を通じて、辺境の特質は「辺境は人為的に創られてきたものである」「辺境は動き、再生される」(233頁)「辺境は自然との共生を育み、広域とつながるポテンシャルをもつ」(234頁)という3点であることが明らかになったと記されている。さらに、「辺境に生きる人びとの知恵や思想、価値に関する評価」(240頁)、「辺境アプローチ、辺境の視座に内在する限界や矛盾への気づき」(241頁)の2点が、辺境に着目しながら研究する意義として挙げられている。同時に、辺境の持つポテンシャルは、紛争を含む否定的な面を上回るとは限らないとも述べられている(242頁)。

2. 本書の特徴や意義

第一に、コロンビアの中でも、辺境に特化して様々な事項が論じられていることが、本書の大きな特徴として挙げられる。すでに本書評にも記したとおり、コロンビアは気候帯や地形がバラエティに富むことはもとより、国民のエスニシティや経済状況なども多様であり、国内で起こる事項を一元的に語ることは難しい。その事情を踏まえると、様々な観点から同国について論じられることが望ましいと言える。コロンビアにおいては、辺境それ自体の中にも多様性が内包されているため、本書のみで同国の辺境に関して全てを知ることにはできない。しかし、辺境に焦点を絞った論考が集められた本書は、研究者や、コロンビアもしくはラテンアメリカについて学ぶ学生のみならず、世界の文化や社会について広く関心を持つ人びとが、コロンビアの現状をより現実的に深く理解することに役立つことは明らかである。

さらに本書は、国内外の境界研究の議論にも寄与すると考えられる。それまでの章の議論を踏まえて終章にまとめられた辺境の特質には、世界の他の辺境と共通する点も見られるが、コロンビア特有の事情も含まれている。例えば、米国メキシコ国境地域を研究対象とするこの書評の執筆者にとっては、マキラドーラに代表される同地域の工業や、国境線そのものを中心的な見どころに据えた観光業が身近であるために、辺境における自然との共生についてのイメージがコロンビア研究者とは恐らく異なっている。また、米国メキシコ国境を越境する人びとにまつわる議論には慣れている一方、国内避難民についての事項と辺境を結びつけて論じることには馴染みがない。タイプの異なる辺境について知ことは、研究者の視点を広げ、各自が専門とする地域の辺境を新たな視点から見直す機会となり得る。そのような機会を境界研究に携わる様々な研究者に提供したことも、本書につい

て特筆すべき点であろう。

加えて、コロンビアの辺境に関する論考が、一冊の書籍に編集して出版されたこと自体にも意義がある。本書の分担執筆者の専門領域は多岐に渡る。そのため、もしも各章が論文として多様な媒体で公表されていたとしたら、コロンビアに特化した研究を行っていない限り、全てを探し当てて講読できる可能性は高くない。境界研究者が本書一冊を手に取りれば、コロンビアの辺境についての複数の研究成果を目にすることができるということには、大きなメリットがあると考えられる。

おわりに

上の部分で述べた通り、本書を通じて提示された考察は、他の境界地域との比較研究に有益なものである。境界研究の分野における研究を量的な面で考えると、現在までに状況は変わってきたとはいえ、未だに北米大陸やヨーロッパにまつわるものが多い状況が続いている印象は拭えない。本書の刊行をきっかけとして、コロンビア以外の南米諸国やラテンアメリカ地域の辺境に関する研究成果の出版が進み、境界研究全体の議論がより活性化することに期待したい。